



「**芸術の規則**」と規則破りの自由と

芸術信仰が自律した社会システムとして離陸する状況

稲賀繁美
Fukuda Shigenori
三重大学フランス文学

文学者でも美術史家でもよい。えてして芸術の研究者は研究対象となる作品を美の祭壇に高々と掲げ、芸術家を天才として崇め尊ぶ。「美」の世界という疑似宗教へ意味な凡人たちを導く司祭の使命感。などと書くと、いやいや私にゃそんな高邁な使命感などありません、一介の学者風情、私心なき文献屋稼業にすぎません、といった謙虚な答えが返ってくる。

だがこの良心的な謙虚さというやつがくせ者だ。無私な貢献こそが作品の高邁さをいやましにかさ上げし、作家や画家を特権化するからだ。万葉集から源氏物語、夏目漱石なり樋口一葉なりを、当然それに値する対象として真面目に研究する教授と柔順な学生たち。そうした学会集団の厚みと業績の堆積こそが、信仰の対象のご安楽に貢献し、構成員の社会的地位を保障する。そのからくりには呑み込まれた「被誓者」たちが「被誓」（つまり業績への先行投資）に無自覚ならばこそ、この「ネズミ講」も効を奏する。特権的な固有名詞の周囲に出来上

がる信仰集団にあっては、支払いをきちんと後世に繰り延べにできれば、自分たちの世代の利潤はちゃんと帳尻が合うのだから。

原書にして480頁の大著、ピエール・ブルデュー(B)『芸術の規則』は、こうした芸術信仰が自律した社会システムとして離陸する状況を分析する。歴史的・社会的には十九世紀後半のフランスが範例となり、作家フローベル(F)がそうした環境の整備に貢献しつつその環境から生み出され、自らの特権をもそこに負う、確信犯的加誓者兼被誓者として登場する。

だがF信仰に加担するF研究者への嘲笑をFをネタに仕組むB一流の策略が、今度はB借者を生むとしたらどうだろう。たしかに芸術の規則への無条件・無自覚な没入が生む無意識の信仰(illusioと呼ばれる)が意識化されれば「永遠回帰」の事態は回避される理屈だ。だが屋上屋の寄生から利潤を得たBの「犯罪」ははたして「暴露」により「免責」される余剰価値なのだろうか。(上巻、石井洋二郎訳、藤原書店)